

# 教職課程における簿記講義ルーブリック作成試案

## A Tentative Plan for Creating Rubrics of the Bookkeeping Lecture in the Teacher-Training Course

島田奈美\*

Nami Shimada

本学の教職課程における商業の関係科目である商業簿記 I に活用できるルーブリックを考案した。総合評価のための計量的ルーブリックと、学修指導のための質的ルーブリックの 2 つを考案した。前者はシラバスと連動させ、科目の到達目標と成績評価の関連性が一目で分かるようになっている。後者は評価基準を重視したものであり、目標に対して現時点で到達している・していない項目を明らかにし、今後の学修指導に活かすことができる。

キーワード：大学教育、ルーブリック作成、ルーブリック評価、簿記教育

### I. はじめに

本稿の目的は、高等学校の教員免許のうち「商業科」の免許状の取得を目標とする学生に対し、本学での簿記教育の成果を将来教育現場で活かすためにどのような形で講義運営していくかについて、ルーブリックの活用を視野に入れた検討をすることである。通常の簿記講義のスタイルは、教員が教科書などの教材の章立てに沿って説明し、学生が問題を解きそれに対して解説を行うというものであり、成績評価の方法は、計算問題が中心のペーパー・テストを課すことが多い。科目の修得を目指す、または日商簿記検定などの資格取得を目指す学生にとっては十分な内容である<sup>1)</sup>と言えるが、本稿で対象とする教職課程科目として簿記を学修<sup>2)</sup>する学生にとっては不十分な内容であるといえる。その理由を確認するために、平成 22 年 1 月に文部科学省により公表された「高等学校学修指導要領解説（商業編）」のうち、第 11 節「簿記」の第 1「目標」と第 2「内容とその取り扱い」を抜粋する。

#### 第 1「目標」

簿記に関する知識と技術を習得させ、その基本的な仕組みについて理解させるとともに、適正な会計処理を行う能力と態度を育てる。

#### 第 2「内容とその取り扱い」

---

\* 流通科学大学商学部, 〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

ア 指導に当たっては、企業会計に関する法規や基準の変更に留意し、企業における取引を合理的、能率的に記帳する知識と技術を習得させるとともに、簿記の基本的な仕組みについて理解させること。

第2「内容とその取り扱い」アに関しては次の文章でこのように解説されている。

この科目の指導に当たっては、適正な会計処理を行えるようにすることが大切である。このため、企業会計に関する法規や基準の変更に随時対応して指導するとともに、会計情報の流れをビジネスに関する実務と関連付けて理解させることに加え、取引の合理的、能率的な記帳及び取引の仕訳から勘定の記入を経て決算に至る簿記の基本的な仕組みに関する例題などを企業における実務に即して工夫し、適宜扱うようにする。

第1「目標」にある簿記の基本的な仕組みを教える事に限定しても、簿記の用語や複式簿記の計算について初学者が理解できるように説明するにはそれ相応の学修および指導経験が必要である。さらに、第2「内容とその取り扱いでは」の要求水準に達するためには、簿記だけに止まらず会計学全般および実務的な知識が必要となってくる。

目標であるとはいえ、上記の内容を将来、教壇に立ち指導することが求められることを考えると、大学における簿記講義においても、用意された問題を解くことができるようになるだけでは不十分どころか、なるべく早い段階で上記の内容を想定した学修が不可欠であることが分かる。商業簿記Ⅰは2年前期に配当されており、将来を具体的に意識付けるタイミングであるいえる。意識付けることを具体的に言えば、簿記を教えるに当たって必要最低限の知識の水準（ボリュームと理解の深さ）を知ることおよび各学生の学修課題を見つけることである。本稿は、3年次に配当される教育実習前に行われるような、教壇に立つことをシミュレーションした実践的内容を提案するのではなく、あくまでも、学生が将来簿記を指導するという事を明確に自覚し、その目標を達成するための課題を発見できる授業の構築を目指している。本稿の目標達成の手がかりとなり得るツールとしてループリックの活用が挙げられる。次節ではループリックとはどのようなツールなのかを説明し、商業簿記Ⅰに活用できるループリックを考案する。最後にループリックを活用することで本稿の目的をどのように達成できるのかを確認する。

## Ⅱ. ループリックとは

近年、大学教育において学生の学びの質向上の観点からループリック評価が推奨されており、活用する大学も徐々に増加している<sup>3)</sup>。以下の先行研究でループリックの定義について説明されている。

Wiggins(1998)<sup>4)</sup> はループリックの起源を次のように説明している。

ループリックという言葉は赤を表すラテン語の“ruber”から派生している。中世の時代には、ループリックは法律や典礼に付記された一セットの指示なり注釈であり、それらは特に朱

書きされていた。このため、ルーブリックは人々に権威を持って何かを指示するあるものを意味するようになった。

学修評価の枠組みにおいて Stevens and Levi (2013)<sup>5)</sup>は次のように説明している。

「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」である。ルーブリックはある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもので、様々な課題の評価に使うことができる。ルーブリックとは学修目標の達成度を判断するため、「評価の観点(規準)」と、観定の尺度を数段階に分けて文章(記述語)で示した「評価の基準」から構成される評価ツールを指す。

この説明により、ルーブリックが学修成果を評価するためのツールである事がわかる。ルーブリックによる評価が有効であるケースについて、テスト法では困難な「思考・判断」や「関心・意欲・態度」、「技能・表現」の評価に向くとされ、フィギュア・スケートや芸術作品の評価などさまざまな分野で用いられているほか、大学では学生の示したパフォーマンス（論文や作品、演出等）をもとにして、レポートの評価、学生の活動や作品・演出・実験の観察評価、面接の評価、プレゼンテーションやグループ活動の自己評価・相互評価、複数の教員で担当する初年次教育、オムニバス授業の評価などに有効である<sup>6)</sup>と言われている。

### Ⅲ. ルーブリックの要素

Stevens and Levi (2013)<sup>7)</sup>によると、基本的なルーブリックは4つの要素（①課題、②評価尺度、③評価観点、④評価基準）で構成され、これら要素によって課題の特徴を規定され、最も単純な様式のルーブリックの場合すべて表形式で配置される。以下要約して紹介する。

#### 1. 基本的なルーブリックの構成要素

表1. 基本的なルーブリックの表

表題

① 課題	② 評価尺度 1	② 評価尺度 2	② 評価尺度 3
③ 評価観点 1	④ 評価基準 1-1	④ 評価基準 1-2	④ 評価基準 1-3
③ 評価観点 2	④ 評価基準 2-1	④ 評価基準 2-2	④ 評価基準 2-3
③ 評価観点 3	④ 評価基準 3-1	④ 評価基準 3-2	④ 評価基準 3-3

出所：Stevens (2013) 佐藤ら訳 (2018) p. 4 を筆者が加工した。

#### ① 課題

課題は教員が学生に期待するある種の「行動」が含まれており、例えばレポート・論文・ポスター・プレゼンテーションといった、特定の形式が求められる。ルーブリックの一番上に課題を記述することで、評価の際に便利な事に加え、学生の関心を引きつける事ができる。課題と成績評価を一緒に示すことにより、その内容や評価基準は学生にとって現実的なものとなり、

注意深く読んでもらえる。

## ② 評価尺度

評価尺度は、与えられた課題がどれだけ達成されているかを表すものであり、ルーブリックの最上段に明記される。一般的なルーブリックで使われるのは「特に優秀 (mastery)」「かなり優秀 (partial mastery)」「前身途中 (progressing)」「萌芽的 (emerging)」という言葉である。これらは肯定的で前向きな表現であり、学生が次に求められていることを言葉で説明している。「上級」「中級」「初級」という表現や数字やA・B・C評定も使われることがある。我が国の大学教育で活用されているルーブリックの評価尺度には数字やアルファベットが多く見受けられる。また、表のルーブリックは左に進むにつれて評価尺度のレベルが上がっていくが、右に進むにつれて評価尺度を上げていくものもある。

## ③ 評価観点

評価観点は、学問的に優れた成果物に結びついていなければならないスキルを具体的に表現すべきである。例えば、しっかりとした内容の理解、技法、引用、例示、分析、場面に応じた適切な表現の使い分けなどがこれにあたる。適切に作成された場合、ルーブリックの評価観点は、こうしたスキルを単に示すだけではなく、採点終了後に学生自身に評価観点毎の強みと弱みを素早く把握する機会を与えることになる。

## ④ 評価基準

一般的には最低でも3つの評価尺度があるルーブリックであり、学生が最高レベルの評価基準を達成しようとする際に最もつまずきやすい点が記述されている。ルーブリックは左に進むにつれて評価基準のレベルが上がっていく。レベルの設定方法について松下(2015)は条件型(条件をだんだん増やしていく)、数量詞型(数量を示す単語や句を使って、数量をだんだん増やしていく)、動詞型(動詞を使って、望ましさの程度をだんだん高めていく)などがある<sup>8)</sup>、としている。

表2. 計量的ルーブリックの例

	レベル1	レベル2	レベル3
理解度	主な考えのうちいくつかが含まれている	主な考えのうちほとんどのものが含まれる	主な考えのすべて、あるいはほぼすべてが含まれている
言葉の使い方	基本的な文型や語彙をいくらか使っている	基本的な文型と語彙のほとんどを使っている	基本的な文型と語彙のすべてあるいはほぼ全てが含まれている

出所: Young and Wilson (2000) 土持・小野訳 (2017) pp. 45-44 を筆者が加工した。

このようなレベルの設定方法のルーブリックはYoung and Wilson (2000)<sup>9)</sup>によれば「計量的ルーブリック」であり、現在どの程度できているかについての情報はもたらずが、どうした

ら学びを向上させられるかの判断を助けるような推論はできない。よって、計量的ルーブリックは教えることと学ぶことという目的のための成長を助けるというよりは、総合的な評価ツールとして有用であると説明されている。

表 3. 質的ルーブリックの例

変容するポートランドのコミュニティ

①課題：ポートランド市内のコミュニティを1つ取り上げて、過去30年間の変化について、5分間のプレゼンテーションを行う。自分の好きなように発表内容を絞り込んで構わないが、単に年代順に説明ではなく、何らかの仮説と論証がなければならない。発表には適切な写真、地図、グラフなどの視覚に訴えるものが含まれていなければならない。

	② 優秀	② 良	② 要再学修
③ 知識/理解	④発表は主張を裏付ける、関連する適切で詳細な資料を使っている。それが歴史的理解の深さを表している。	④発表は、総じて正しいが、一部不正確な知識を使っている。総じて主張と関連している。	④発表は、あまり関係のない、不正確な情報を使っている。しかも授業や課題文献にも扱われていない情報である。

出所：Stevens and Levi (2013) 佐藤監訳 (2018) p. 11 を筆者が加工した。

これに対して「質的ルーブリック」で評価基準を質的な表現を用いることで、学びが成長するそれぞれの過程の特徴が理解できる。上記のルーブリックは質的ルーブリックに該当する。このルーブリックで注目すべきは、評価尺度の良の部分では理想的なレベルと比較してどこが違うのか記載されているのに対し、要再学修の部分では達成すべきだった事が強調されて記載されているところである。それにより、できなかったという事実のみではなく、評価内容を通じて今後の学修計画を立てることが可能であることから教育的な側面が現れているといえる。

このように、ルーブリックには評価基準の設定方法により評価ツールとしてだけでなく教育ツールとしても活用でき、状況によって使い分けることでより効果的に活用できる。

#### IV. ルーブリックの効用

計量的ルーブリックと質的ルーブリックの両方を活用することで、学修評価だけではなく、学修指導にも役立つことがわかった。具体的にどのような効用があるのかについて Stevens and Levi (2013)<sup>10)</sup>は、①タイミングの良いフィードバック、②学生による詳細なフィードバックの活用、③批評思考力のトレーニング、④他者とのコミュニケーションの活性化、⑤教員の教育技法の向上などの効用を挙げている。以下要約して紹介する。

##### ① タイミングの良いフィードバック

課題の評価において、教員は公正かつ個別のフィードバックを学生に与えようと努力するが、あまりにも時間がかかりすぎるとフィードバックの効果が薄れてしまう恐れがある。

ルーブリックを使えばそのような問題を解決することができる。ルーブリックの評価基準のうち、当てはまる項目に○をつけるだけである。ルーブリックは教員にとっては簡単採点方法で

あり、学生にとってはタイミング良く詳細で読みやすいフィードバックとなる。

#### ② 学生による詳細なフィードバックの活用

ルーブリックは、最高の評価を得るために必要な事項の説明と詳細なフィードバックを与えるものである。学生は、どうやって、どの部分で自分の提出物が目標を達成できたのか、もしくはできなかったのかについて必要な全ての詳細情報を受け取ることができ、どうすればもっと良くなるのかという助言さえも受け取ることができる。

#### ③ 批評的思考力のトレーニング

学生はルーブリックを通して課題の中で繰り返すつまずく箇所や継続的に伸びている部分を自覚する。自らの学修について批評的に振り返ることを学生に促すことで、確実に「自己評価と自己改善」を習慣化するよう、学生を奮い立たせることができる。

#### ④ 他者とのコミュニケーションの活性化

大学教員はたいてい他者と協働しながら教えている。ティーチング・アシスタント (TA)、ライティング・センターのスタッフ、チューターや非常勤講師、学生が習っている他の全ての教員である。ルーブリックはこれらの全ての人々の間で、教育目標と意図を共有することを可能にする。

#### ⑤ 教員の教育技法の向上

過去のルーブリックを保管しておくことで、与えられた課題において学生がいかに行動すべきかを知る個別の詳細な記録となる。そしてそれは、複数の授業に亘って共通に存在している盲点や掛けている部分を教員が素早く見抜き、指導できるようにしてくれる。

さらに、田宮 (2014) は成績評価の説明責任の観点で、ルーブリックの効用を①規準・評価基準を明確に提示することにより、授業および成績評価に対するアカウントビリティを確保できる、②教員の意図をはっきりと示すことができる、③採点のぶれが少なくなる、④自らの成績評価の盲点を知ることができる<sup>11)</sup>と挙げている。

## V. 商業簿記 I (教職課程科目) におけるルーブリック案

本稿では、ルーブリックを成績評価のための計量的ルーブリックと学修指導のための質的ルーブリックに分け、前者の作成については沖 (2014) を参考とし、後者の作成には Stevens and Levi (2013) および沖 (2014) を参考にした。

本学の簿記講義の中で教員の免許状取得のための必修科目は商業簿記 I (2 年前期、全 30 回) である。商業簿記 I は学修範囲を日商簿記検定 3 級の出題範囲としており、その範囲において到達目標を次のように設定する。

- ・ 簿記という記録方法の一通りの「流れ」を理解する。
- ・ 必要最小限度の計算問題を自分自身でできるようになる。

- ・ 学修事項を平易な言葉を使って説明できるようになる。

本講義は、模擬講義などの実践的な訓練を想定しておらず、あくまでも履修学生が将来教壇に立ち、生徒に簿記会計を教えることを自覚し、簿記の問題を解けるだけではなく、学修事項を説明できるようになるためには何をどのように学べば良いのかを理解し、自ら学修できるようになることを目標としている。

沖（2014）はシラバスに到達目標ごとの総括的評価がどのような手段（期末試験、レポート、提出物、発表等）でどの程度の比率で評価されるのか、あらかじめ明示されていることはほとんどなく、実際、多くの大学では、シラバスに書かれた到達目標が依然曖昧な表現に留まり、成績評価も到達目標に示された内容とは関係のない手段で行われることが往々にして見受けられる<sup>12)</sup>、と指摘している。シラバスにおいて、到達目標と成績評価を連動させて示すことにより、成績評価の客観性と厳格性が保たれる。

表 4. シラバスにおける到達目標と成績評価方法・割合

到達目標	評価手段	評価比率
必要最小限度の計算問題を自分自身でできるようになる。	定期試験および 中間テスト	40%
簿記という記録方法の一通りの「流れ」を理解する。		30%
学修事項を平易な言葉を使って説明できるようになる。	平常点 (レポート)	30%

出所：沖（2014）p. 81 を参考に筆者作成。

表 4 は到達目標と成績評価を関連づけて一覧にしたものである。簿記は計算問題を解きながら会計学の知識を理解していく技術色が強い学問であるため、どうしても計算問題をテスト方式で評価せざるを得ない。しかし、それ以外の到達目標については記述式の問題やレポート課すことで質的な評価が可能である。これらの到達目標について総合的評価のためのルーブリックを作成したものが表 5 である。

表 5. 総合的評価のための計量的ルーブリック

科目の 到達目標	D (不可)	C (可)	B (良)	A (優)	Ⓐ (秀)	評価比率
簿記という記録方法の一通りの「流れ」を理解する	(～17 点) ほとんど理解できていない。	(18～20 点) 多少間違えているものの、いくつか理解できている。	(21～23 点) 一部不正確であるものの、内容を概ね理解している。	(24～26 点) 教科書の内容を完全に理解している	(27～30 点) 教科書のレベルを超えて深く理解している。	30%
学修事項を平易な言葉を使って説明できるようになる	(～17 点) 学修事項の意味を理解できない。	(18～20 点) 教科書の言葉をそのまま使って説明できる。	(21～23 点) 一部の言葉を平易な表現に置き換えて説明できる。	(24～26 点) 概ねわかりやすい表現で説明できる。	(27～30 点) 誰が聴いても分かる表現で説明できる	30%

出所：出所：沖（2014）p. 83 を参考に筆者作成。

表5に示されるようなルーブリックを共有し、また学生にも提示することにより、成績評価の公明性が增大するとともに、到達目標の達成度を通して授業改善の基礎資料を得ることも可能となる<sup>13)</sup>。しかし、評価基準に使われている言葉のうち、「一部」「概ね」などの表現の解釈は人によって千差万別であるため、教員が求める水準について事前に学生に説明し理解を得ておく必要があるだろう。

次に、平常点として定期的に小レポートを課した場合のルーブリックを考えてみる。小レポートの実施により、教員が学生の理解度を確認するだけに止まらず、各学生のレポートの問題点を明らかにし、改善を繰り返すことでより深い理解へとつながっていく。学生が自らの課題に気づくことを目的としているので、理解しやすいように評価尺度は少なめに設定しても良いと考える。また、2、3回に1回定期的にレポートを課すことを想定すると、1回あたりの配点はせいぜい3点程度なので、細かく評価尺度を設けても意味がない。

表6. 学修指導のための質的ルーブリック

減価償却の意味・目的・計算方法

課題：減価償却の意味・目的・計算手法について説明しなさい。教科書を参考にしてもよいが、自らの言葉でよりわかりやすく説明すること。また数値例、図表を用いて視覚的に理解を促すような工夫をすること。

	優秀	良	要再学修
自らの言葉で平易に説明できているか。	全体を通じて、自らの言葉で平易に説明できている。	教科書の説明をそのまま使っている部分があるが、概ね自分の言葉で平易に説明できている。	全部またはほとんどにおいて、教科書を写しただけである。
文章の正確性	説明に間違っている箇所がない。	一部正確性に欠ける表現があるが、全体的な理解に影響を及ぼさない。	正確性に欠ける部分が多く、テーマの理解に役立たない。
視覚的に工夫がなされているか	・数値例・図表が正確・明瞭である ・適切な説明を加えられている。	・数値例・図表の一部に不正確、不明瞭な点がある。 ・説明が加えられていない。	・数値例・図表を用いていない ・数値例・図表を用いたとしても質が低く、テーマの理解に役立たない。
形式面に問題はないか	・誤字・脱字がない ・段落も明確である ・「だ・である調」で統一されている	・誤字・脱字が1つ2つある ・段落も明確でない箇所がある ・「だ・である調」で統一されていない箇所がある	・誤字・脱字が多い ・段落も明確でない ・「だ・である調」で統一されていない

出所：Stevens and Levi (2013)佐藤監訳 (2018) および (沖 2014) を参考に作成した。

学修事項を平易な言葉を使って説明できるようになることを目標として使用するルーブリックであるため、「わかりやすい説明」に必要な要素を評価観点に加えた。評価尺度の「良」について



は、少しの修正で教員の求める水準に到達できることが分かり、「要再学修」とすれば、根本的に理解できていないので、その学修事項について一から学び直す必要がある事が分かり、数字やアルファベットよりも評価の位置づけが明確である。評価基準については、必要要件を一つの文に列挙している例もあったが、上のルーブリックでは要件を細分化し、各マスのうち、部分的に該当する・しない場合にも対応できるようにした。例えば「形式面に問題はないか」という評価観点について、誤字脱字があるが、段落は明確で「だ・である調」で統一されている場合、誤字脱字の部分に丸をつけるだけでよい。該当する評価基準に印をつけ学生に返却することで、レポートに問題点があるという評価だけではなく、どのように修正・工夫すればさらに良いレポートになるかの指針も示すことになる。

## VI. おわりに

教職課程における簿記講義の目的は、簿記の問題を解く能力を身につけるだけではなく、将来教壇に立ち簿記を教えることを目標とする学生に対して、教える側として必要な知識の水準を知ってもらい、その水準に達するまでどのように勉強を進めていけば良いかを具体的に認識させ、それを実行させることである。したがって、簿記に関する計算問題を解かせるテスト法のみでの成績評価方法では不十分である。それに対して講義の各テーマの理解度についてルーブリックを使って質的に評価し、その結果を学生にフィードバックすることで、どの部分で目標を達成できたのか、できなかったのかについて学生は詳細な情報を受け取ることができ、どうすればもっと良くなるのかも理解できるようになると考える。したがって、本稿では、本学の教職課程における商業の関係科目（必修科目）である商業簿記Ⅰの講義に活用できるルーブリックを考案した。

総合評価のための計量的ルーブリックと、学修指導のための質的ルーブリックの2つを考案した。計量的ルーブリックはシラバスと連動させ、科目の到達目標と成績評価の関連性が一目で分かるようになっている。質的ルーブリックは小レポート1回毎の配点が低いことと、理解しやすさを考慮して3段階のルーブリックにしている。このルーブリックではどの評価尺度に位置しているかよりも、評価基準を重視し、学生の現時点での課題を明らかにし、今後の取組みがイメージしやすくなっている。

ルーブリックの作成には複数の教員が参加し、議論を経て作られることで、精度が上がり客観性が増すとされている。本稿では筆者が単独で様々な文献を参考にルーブリックを考案した。実際に活用するまでには、教員養成教育の専門の教員と簿記・会計の専門の教員の方々のご意見を頂戴し問題点を修正していく必要あり、これを今後の課題としたい。

- 1) 日商簿記検定試験に関しては大学の学年歴と検定試験日程のタイミングの関係で効果的な学修が難しいことや、大学講義内で試験対策をすること自体について議論があることなど全く問題ないとは言えないが本稿でその問題は扱わない。
- 2) 中央教育審議会の答申（2012）以来、大学での学びはすべて「学修」に改められており、本稿では、引用・参考文献の表現以外について学修を用いることにする。
- 3) 濱名（2012）において、関西国際大学のルーブリック活用例が紹介されている。
- 4) 高浦勝義：「絶対評価とルーブリックの理論と実際」（2012）黎明書房 p.77。ただし、原著は G. Wiggins：“Educative Assessment—Designing Assessments to Inform and Improve Student Performance”，*Jossey-Bass*, (1998), p.154.。
- 5) ダネル・スティーブンス・アントニア・レビ，佐藤浩章監訳・井上俊憲・俣野秀典訳：「大学教員のためのルーブリック評価入門」（2018），玉川大学出版部 p.2.
- 6) 沖裕貴：「大学におけるルーブリック評価導入の実際—公正かつ厳格な成績評価を目指して—」（2014），立命館高等教育研究 14 号，p. 73.
- 7) 前掲 4) pp. 4-9.
- 8) 松本佳代、京都大学高等教育研究開発推進センター編著：「ディープ・アクティブラーニング」（2015），p. 180.
- 9) スー・ヤング・ロバート・ウィルソン，土持ゲーリー法一監訳・小野恵子訳『『主体的学び』につなげる評価と学習方法—カナダで実践される ICE モデル』（2017）東信堂，pp. 44-45.
- 10) 前掲 4) pp. 13-20.
- 11) 田宮憲：「ルーブリックの意義とその導入・活用」（2014），高等教育センターフォーラム，Vol.1, pp.127-128.
- 12) 前掲 5)p. 80.
- 13) 前掲 5)p. 83.

#### 参考文献

- 安藤輝次：「持続的な学びのための大学授業の理論と実践」（2018），関西大学出版部。
- 西岡加奈恵，永井正人，前野正博，田中容子，京都府立園部高等学校・附属中学校編著：「パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる」（2017），学事出版。
- 濱名篤：「ルーブリックを活用したアセスメント」（2012），[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/07/1328509\\_05.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/12/07/1328509_05.pdf)，（2018年12月9日取得）。
- 松下佳代：「パフォーマンス評価における学修の質の評価—学修評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高

等教育研究第 18 号』(2012), pp. 75-114.

三浦和美、渡会純一、伊勢 恵、山下祐一郎：「大学教職課程における講義ルーブリック作成の実際」(2017),  
教育情報学研究, 第 16 号, pp. 35-48.

三山緑、田中泉：「教職課程履修学生の『学習指導技量』評価のためのルーブリックの開発研究－10 の評定項目  
を基にした作成試案－」(2018), 広島経済大学研究論集, 第 41 巻, 第 1 号, pp. 67-77.